

【巻頭言】

会長就任のご挨拶

神澤 良明(43 回生)



このたびの東日本大震災で被災された同窓の皆様方にお見舞い申し上げます。また、同窓生のお一人が職場でお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

学友会では被災地域の同窓生の安否確認を目的にアンケートを実施しました。全員の方からご返事を頂いてはませんが、アンケートにお答えくださった皆さま方はそれほど大きな被害もなく不幸中の幸いでありました。困難なことも多いと思いますが、早い復旧をお祈り申し上げます。

2011年京都学友会総会には会員、招待者に加え協賛していただいた方を合わせ約 130 人がお集まりになりました。

先輩、後輩が年齢の垣根を越え和気藹々と話している様子を見ると、この学校のすばらしさが実感できました。ほかの学校にはこのような雰囲気はないと聞きますが、私も専校を卒業して、このすばらしい学友会に籍を置くことを喜びと感ずるとともに、誇りに思っています。母校のすばらしさは建学の精神と 80 数年の歴史がそうさせているのだと感じています。この学校の創設者 2 代目島津源蔵が述べている建学の精神「レントゲン学に関する技術を教授するとともに、品性を陶冶し^{とうや}有為^{ゆうい}の技術者を養成するを以て目的とす」を実践してきた賜物だと感じています。この建学の精神と 80 数年の歴史の中で育った卒業生に共通する何かがあるのです。この何かは校風と漠然と表現できますが、それだけではないような気がします。もっと漠然とした表現をすれば学校が取り持つご縁だともうけとれます。すばらしいご縁をいただいたものです。

近年、学生の就職が非常に困難となっているように感じます。しかし母校を卒業して国家試験に合格した卒業生は全ていずれかに就職されています。これも京都を卒業した人は優秀であるとの評判を先輩方が^{つちか}培ってきたお陰です。先輩が後輩のために就職に関して声をかける。これもこの学校の特色ではないでしょうか。

優秀な人材を輩出してきたという証拠に多くの同窓生が大学の教授や教官となって技師教育に就いておられる。これはこの学校を卒業したから教育に携われるということではなく個人の努力によるところが大きいのですが、同窓生の多くが教鞭を執っておられることに敬意を表するとともに、個人的にはうれしく思っています。

以前から「技師教育は技師の手で」とよくいわれてきましたが、それが現実となってきました。大学の学生が巣立って、ますます優秀な卒業生を送り出し、この傾向に拍車がかかると信じています。

これからの学友会を考えると、どうしても短大卒業生にこの学友会の牽引役になって頂きたいと考えています。現在、現存する同窓生約三千余名の約 56.4%がレントゲン技術専修学校、京都放射線技術専門学校、京都医療技術専門学校、約 42%が京都医療技術短期大学、約 1.6%が京都医療科学大学の卒業生であります。56.4%の約半数 940 人は 60 歳を超え、あと 15 年もすれば現役で職に就いている人のほぼ全員が短大卒業以降の卒業生となります。

この 15 年の間に学友会を短大卒業生にバトンタッチする必要があると考えます。無理やりに引き継いでも、うまくはいかないので徐々になれ親しんでいただきたいと思います。このすばらしい学友会を末永く継続するためにも若い力を必要としています。

現在の学友会組織とシステムを作っていたいただいた諸先輩に感謝するとともに、会長を仰せつかった重圧をひしひしと感じています。会長に選ばれ、お引き受けした限りは全力で課題に取り組み、学友会の目的

にあるように会員相互の親睦を図るために努力をして参ります。加えて、大学の発展に寄与できるように取り組んでいきたいと考えています。次の世代にバトンタッチをするためにも会員の皆様の温かいご支援とご鞭撻を御願い申し上げます。

以上

* 通巻 200 号 2011 年 7 月 10 日発行(H23 - No.2)より